

# バットに夢託して

「巻頭特集」  
中京高校硬式野球部 元謙太選手の決断

甲子園の中止という異例の夏を終え、多くの3年生が次の夢へと歩みを進める中、さらなる高みを目指す高校球児もいる。中京高校硬式野球部で多治見市出身の元謙太選手は、プロ志望届を提出した。県独自の大会で、投げれば140キロ台の速球、打てば3本塁打と、二刀流の活躍を見せた逸材は、野手としてプロでの活躍を誓う。

KENDAI GEN  
元謙太





プロ野球で動画を  
チェック元選手の大事に  
している言葉を聞こう

学校で同級生たちと練習。週に1回通っているセンタースポーツは、小学6年生のころからお世話になっているという。寮の閉鎖中は、身体がなまならないようにトレーニングメニューを考えてもらったそう

## 野球を始めた当初から プロになる夢を描く

レフトスタンドに突き刺さった逆転満塁ホームラン。中京高校硬式野球部、元謙太選手の名前を聞いて、昨夏の甲子園の感動を思い出す人は多いだろう。大会史上初めて、投手として逆転満塁ホームランを放つという偉業を成し遂げたのは、準々決勝の作新学院戦。1点を追いかける8回裏無死満塁で、長打力のある元選手にチャンスが回ってきた。

無死満塁となれば大量得点を期待したくなる。だが、すべての塁が埋まっているためダブルプレーのリスクも捨てきれない。攻める側にとっても守る側にとっても切羽詰まった状況において、どんな思いで打席に立ったのか。さぞ緊張しただろうと思いきや、元選手からは驚きの言葉が返ってきた。

を離れて他県の高校へ進むいわゆる「野球留学」は、もちろん選択肢にあった。実際、中学1年生時には大阪桐蔭を視野に入れていたという。

地元への進学を決めたのは、今井監督の息子で、東濃シニアの先輩の今井順之助選手（現・北海道日本ハムファイターズ）の存在が大きかった。印象的だったのは、中京高校の主力打者として挑んだ2016年夏の甲子園での姿だ。14年ぶりの大舞台を応援しようと、盛り上がる地域を見て、地元の人から応援されることへの憧れの気持ちを持った。

決意は固く、他校からの誘いを断って中京高校へ。1年生の夏からベンチ入りし、2年夏の甲子園ではビッグイニングをもたらす勝負強さを見せつけた。「来年も甲子園に行けよ」。先輩たちの激励を胸に、主将として、エースとして、主砲として、最後の夏にかける思いは強かった。

「ベンチで打順を待っていた時から、先輩たちには『お前に回すから』と言われていたので、何とかつなごうという気持ちで臨みました。自分はチャンスが来れば来るほど、気合が入るタイプ。打った瞬間入ったと確信しました」

非凡な才能は、幼い頃からその片鱗を見せていた。元選手が野球を始めたのは小学3年生のころ。野球を始める前はサッカーに取り組んでいたが、1カ月ほどで見切りをつけた。理由は「人並みにしかできなかったから」。スポーツをする以上は、トップレベルを目指したいという高い目標を掲げていた。

元々はピッチャー志望だったものの、このころからスピードの速かった球を取れるキャッチャーがおらず、最初はショートポジションに付いた。その後キャッチャーやピッチャーを経験しながら、小学6年生の時に

## 決勝での131球の力投 「悔いはない」と見せた笑顔

5月20日、日本高等学校野球連盟は春のセンバツに続いて、夏の甲子園の開催中止を決定した。寮が閉鎖していたため、元選手は自宅での発表を聞いたという。

「何も考えられない状態でした。家族で夕食を食べた時も、言葉が出てなくて。悲しいより、驚きのほうが強かったですね」

ようやく実感が湧いたのは、6月に寮が再開してから。ムードメーカーだったチームメイトが喋らない。いつも賑やかな声であふれていた食堂が静かなまま。甲子園に挑戦すら許されなかった幕引きに、県独自の大会開催の決定も、「最初はみんな、やる意味はあるのか?という思いがあったはずです」と元選手は語る。だからこそ代替ではなく、「夏の県大会として」2連覇を目指そうと決めた。

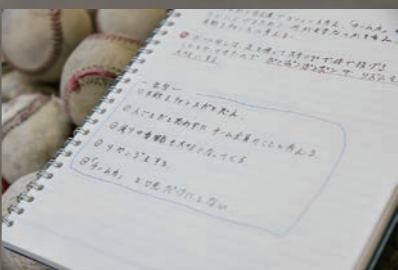
密にならないよう班を分けるなど、工夫をしながら練習を重ね、勝ち進んだ大垣日大戦。2年連続で同じカードとなった決勝戦は、毎回のように試合が動く壮絶な展開となった。中京は5回終了時に3点差をつけるも、その後じわじわと追いつかれ、タイブレークへ。先発した元選手は10回131球の力投を見せたが、あと一步勝利に及ばなかった。悔しい結果に終わったはずだが、プレーを振り返る元選手の顔には、意外にも晴れやかな笑顔が浮かんでいた。

は、NPBの選抜チーム「中日ドラゴンズシニア」に選出。中学時代は岐阜東濃リトルシニアに所属し、阪急ブレーブスで活躍した今井茂監督に指導を受けた。

## 長打力の秘訣は 身体づくりに有り

今でこそ体重85kgと、186cmの高身長に見合った体格だが、小学校卒業時には身長175cmに対し体重

はわずか55kgしかなかった。「一流の選手になる近道は体づくりから」という今井監督の指導のもと、食トレに取り組んだ。毎晩食べる白米はなんと4合分。「身長はもともとあったので、そこに体重が加われば、ほかの選手より優位に立てる。とにかくご飯を食べて体を大きくできたのが、長打力につながったのでは」と元選手は分析する。



その日の練習メニューやポイントをまとめた野球ノート。表紙にはチームの特徴である「チーム力」の文字が。一番印象に残っているページを見せてもらうと、橋本哲也監督からの指導があった

## 倍の練習量をこなした冬、そしてコロナがあつて一致団結し、 積み重ねてきたことを出せた。悔いはありません

「まさかこんな試合ができるようになるなんて。昨秋の県大会は2回戦で負けてしまいましたから、新チーム発足当初は誰も思っていなかったと思います。倍の練習量をこなした冬、そしてコロナがあつて一致団結し、積み重ねてきたことを出せた。悔いはありません」

同級生の中には、大学で野球を続ける人もいれば、高校で区切りをつける人もいます。そんな同級生たちの夢と期待を背負っているからこそ、

恵まれた体格に、長打力、目的意識の高さに、プレッシャーに負けない精神力。「未来の鈴木誠也の器」との呼び声も高いが、これからのどんな選手へと進化を遂げるのだろうか。たくさんの思いを託されたバットを手に、今日も元選手は練習に励む。運命が決まるプロ野球ドラフト会議は10月26日（月）開催だ。



Profile  
**元 謙太**選手  
[げん・けんたい]

2002年5月17日生まれ。多治見市出身。小学校時代は池田少年野球クラブでプレー。平和中では岐阜東濃リトルシニアに所属し、中京高校に進学。遠投は100m以上、50m走は5秒9.186cm、85kg。右投右打

3年生が引退し、1、2年生主体に切り替わった硬式野球部。キャプテンを務めるのは、昨夏の甲子園で4強入りに貢献した小田康一郎選手。「先輩たちもきつとやってくれる」と練習を見つめる眼差しは優しい